



2015年10月15日 発行

2015年秋号

<第32号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/池田直樹 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 info@works-union.org http://works-union.org/tao1.htm

短期にはいったこと

僕は、短期入って2年目になります。

おふろそうじ、やってさいごの日は、へやのそうじを、やってせんたくを、やって、19時30分すぎでねてます。朝ごはんとはんごはんおたのしみにしてます。3年目もたぶんグランドになるとおもいます。家では、おふろそうじやらないけど、水くみを、もってせんたつきまでもってくるのが、家でありました。

家では、テレビで、競馬と、プロ野球を、みえます。たまに、クイズとかも、みるときあります。ユニオンはきて3年目になります。

軽作業をがんばっています。たまにプロトワークにも、いっています。エコボンと、カタボンを、やっています。こうちゃんあがるようにしたいです。短期は、何年までおるか、わかりません。ふくを、きれいにたたむことも、するようにします。

土中 誠

ふたたび「呼称」について

平成二十四年十月に「障害者虐待防止法」が施行された。施設従事者である私たちは、これまで以上に「虐待」につながる「不適切なケア」を、できるだけ早期の段階で気づき、虐待の芽を摘み取り、虐待へとエスカレートさせない努力が必要である。そうした取り組みの一つとして、ユニオンでは利用者さんのことを「さん」付けで呼ぶことを決めた。また、会話でのコミュニケーションが取れる利用者さんが多いこともあり、特に「言葉の暴力」を行っていないか、常に検証する必要があると考えている。さて、そうした背景で、現場で私たちはどれ位のことができているのであるだろうか？

ワークスユニオンでは三年前から、利用者さんの呼び方をあだ名や「ちゃん」付けでなく、「さん」付けに統一することになった。

私自身はその少し前から、「ちゃん」付けは、利用者さんを子ども扱いするだけでなく、彼らの精神的な自立心を阻害すると感じ、呼称を「さん」付けに徹底するようにしている。

さて、ワークスユニオン全体としてはどうだろうか？

称を徹底しようとのことだ。つたのだが、出来ていないのは、正直、職員各々の意識の問題と想っていた。

しかし、今年の四月に入り、再びこの呼称について話し合った時に気付いたことがある。自分自身、職員同士で話をする時は、利用者さんをあだ名などで呼んでいることが多いのだ。そして職員の間でもあだ名で呼ぶことが多いのだ。

中堅職員である自分が、利用者さんのいない場所であつたとしても、あだ名で呼ぶことが、他の職員に大きな影響を与えていることに気付いた。職員各々の意識の問題ではない、自身の問題であつたのだ。

それからの自身の今年の目標は、職務に就いているどの場面でも、利用者さんに限らず職員の間でも「さん」付けで呼ぶことだ。意識せずに自分の体に染み込ませるにはもう少し時間がかかりそうだ。しかし、職員全員がそうした意識をも

つてもらうためにも、努力したい。
(坂田)

呼称(呼び方)について、自分自身できていないことが多く、反省すべき点である。

利用者さんとの関係の中で、「ちゃん」付けやあだ名で呼ぶことで、お互いの距離を近づけることはできるかもしれない。しかし、逆に近付き過ぎ、「利用者」「支援者」の関係性はしっかりと築けているのだろうか。良い距離感で支え続けられるためには、しっかりとお互いのことを理解した上で関係を築き、「さん」付けで呼ぶことを徹底していかなければならない。

呼称に限らず、日頃から子ども扱いしていないかなどの虐待防止を含む、権利擁護も意識し、自己決定の尊重にも注意していかなければならない。

心理的な虐待は無意識にしているだろうか。

他の利用者さんの前で、「ちよつと体臭がすごいなあ」「わっー〇〇キロにもなってるでーどうするん？」と大きな声で言った。職員間ではできない言動をしてしまつてはいないだろうか。

意識的な虐待はもちろん、無意識の虐待は周りの話し合える、注意し合える環境がなければ改善されない。また、「虐待」という言葉だけを重く取ってしまうがために、「ことなかれ支援」になつてはいないだろうか。何もしなければ何も起こらない。しかし、何も起こらないことは果たして「支援」と呼べるだろうか。

考えれば考えるほど難しいことだとは思ふ。しかし、「支援のプロ」として日々考え、悩んで、チーム全体で利用者さん一人ひとりを支えることができる支援者集団でありたいと思つている。
(岩本)

クラブ近況

ダンス発表会

UNION ☆ STARS

7月26日に、ユニオンのダンスクラブ「UNION ☆ STARS」が、講師の瀬口先生のダンス教室主催の発表会に出演しました。

メンバーは、この日のために、年明けから新しい曲での振り付け練習を重ね、直前には毎週月曜日以外にも、土曜日に「特練」なる追加練習も行っていました。

休日の予定を変更して練習する事は、かなり大変だったと思いますが、この間、利用者さんはほぼ休むことなく、頑張っていました。

発表会当日は、朝から場当たりやりハールサル、メイク等、慌しく時間が進んでいきました。本番前、緊張から表情が硬く、口数も少ない利用者さんもありましたが、周りの利用者さんが励ましの声をかけて盛り上げていてとても印象的でした。

本番では、始まって早々に利用者さんが、お客さんを前にして興奮してしまい、列が乱れて他の利用者さんと何度かぶつかり、混乱することがありました。

しかし、瀬口先生から言われていた「失敗しても止まらずに踊り続けよう」という目標を、皆さん実践することができていました。多くの方が応援に来てくださったことも、とても励みになっていたと思います。



本番後には、皆さんやりきった清々しい表情で、本番を思い返しており、その日のうちに、「次回の発表会は、曲を増やして3曲踊りたい」と、次回の発表会への意気込みを発表している利用者さんもいました。

個人の特性に配慮しながらメンバー皆が気持ちよく踊ることは、簡単ではないと思いますが、少しずつ利用者さんの気持ちの中に、チームでの仲間意識が芽生えていることは確かです。

今後もチームの皆で試行錯誤しながら、ダンスクラブを盛り上げていきたいと思っています。(横田)

ユニオンラッシュ

合宿を終えて

9月21日から22日にかけて、クラブの定例行事となりつつある合宿を実施しました。昨年は車で滋賀県のオートキャンプ場に向かいましたが、今年は電車で大阪府立青少年海洋センターへ向かいました。

内容は、カッターボートの海洋体験やバーベキュー、大会に向けた練習で、昨年とは一味違った1泊2日となりました。

カッター体験は、2人1組で「漕(かい)」を漕いでボートを進める体験でした。最初は、漕ぎ方のコツがつかめず、まっすぐ進まずに悪戦苦闘しましたが、徐々に全員の息が合うようになり、利用者さんにも笑顔が見られ、一致団結してものごとをやり遂げる達成感を味わえました。この体験の成果は大会にも活かせると思います。

夕飯のバーベキューでは、昨年の火起こしの教訓を生かし、段取りよく準備できたことで、夕暮れを見ながら食事ができました。準備や片付けをテキパキと行っていた利用者さんの姿が印象的でした。

食後はキャンプファイヤーを行い、暗闇に映える薪の炎を見ながら、「焼き芋作ればよかった」など食欲の秋を彷彿とさせる話題で盛り上がり、「焼き芋」は来年の課題として検討し、有意義な時間が共有できました。宿舎は2段ベッドが並ぶ

8人部屋で、ベッド上段の取り合いになるかと思いましたが、予想を反して下段の取り合いになっていました。社会人になり2段ベッドを使う経験も少なく、貴重な体験だったと思います。



ユニオンラッシュの設立から幾年も経ち、利用者さんのスキルだけでなく、各チームの団結力も身に付いてきたと思います。この合宿で得たものをバネにして、これからも大会で優勝することを目指し、日々の練習に取り組んでいきたいと思っています。(高橋)



ワークスユニオンの一人の利用者の紹介をする。

手足に軽い麻痺のあるAさんは、入浴時に体の隅々までは洗いきれないとか髭剃りが自分ではできないとか、苦手なことはたくさんある。

しかし、知的レベルや身体的な状況から考えて、私は、この人ほど、気持ちのコントロールができ、大人としての振る舞いのできる人に接したことが無い。

利用者でも支援者でも何か手助けしてもらえば必ず「ありがとう」とお礼を述べ、他の利用者のように、パニックを起こし大声を出すことなども皆無なのだ。

お父様との話の中で、Aさんの大きな転機は山川さ

んと出会い、その勧めで「通勤寮」での生活を自ら選択したことだったとお聞きしたが、たぶんお父様の愛情と「一人の独立した青年」と捉えた接し方が、この人の心の成長を促進させたのだろう。

毎週末には帰省していたAさんは、自立心の高まりとともに、帰省の頻度が減り、お母様は少し淋しそうとのことだが、お父様の表情には、Aさんの成長を喜んでおられることが、ひしひしと感じられる。父に「一人の大人」として接してもらえたことが、この人の成長の原点だと私は考えている。

保護者の皆さん、職員諸君、利用者たちは庇護の対象ではない。「人ひとり」人格を持った大人なのだ。私たちが大人に対する接し方に徹すれば、自ずと彼らの心も成長を遂げてくれると私は信じている。

職員紹介

桑原 友貴 (むくわら ゆうき) ウークス単

一児の母でもある彼女。得意なことはフェルティングニードル作りで、よく人形を作っては娘や友達にプレゼントしているのだから、しかし、休日は年間バスポートを使い、娘とUSJで過ごすことが多く、時には一人でジェットコースターを楽しみに行くというアクティブな一面もあります。最近興味があることは蛇カフエに行つて、好きな大蛇を首に巻くことだそうです。周囲の理解が得られ

ず、同行者を募集中とのこととです。

今後の支援では、話し合いの場を多く持ち、利用者さんと一緒に考えながら作業ができる環境づくりに努めたいそうです。

志水 弘子 (しづみ ひろこ) ウークス単

入職して1年4ヶ月。利用者さんの小さな変化も見逃さず親身に話を聞き、アドバイスをくれる彼女の周りには人が絶えません。

そんな彼女ですが息子が空手を習っていた影響で、格闘技観戦が好きだそうです。自身も空手を習っていた頃は、肋骨が折れた経験もあります。その後はボランティアで、1000人程度のリーダーとして大会運営や進行を務めるなど、リーダーシップも持ち合わせています。

今後の支援では、「日々勉強、日々反省」をモットーに、利用者さんの喜びに繋がる体験づくりを模索中のようにです。

編集後記

▼昨年度より、「褒める」という事を意識している。きっかけは、地下鉄で見つけた褒める事を目的としたセミナー「ほめ遠」なるものに参加した事である。▼いざ実施課題に取り組んでみると褒める事が下手と自覚してしまふほどできない。

何が足りないと言われると倒的に少ない。▼障害者福祉の世界でも褒める事は重要視されている。今年度の個人的目標は、事業所に来た利用者さんを、一日一回必ず褒める事。毎日褒める事をできているかと言われると勿論すべての利用者さんに対して言えていない日もある。▼仕事時だけ意識するのではなく、日常から褒める事を意識して生活すれば、今以上に身につくのではないだろうか。どんなに些細な事でも見つけて褒めるように意識していきたいと考えている。